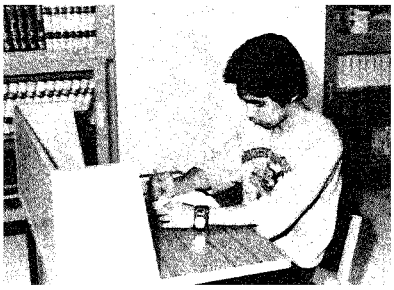
# 五月の購入図書

## 一般図書

古事類苑(30)遊戯部　細川潤次郎等編
東海道分間延絵図第四巻　文化振興会編
薪能　磯崎史郎共著
雇用革命　松本紘斎
ガンと古梅霊芝　総理府編
婦人の現状と施策　日本文化会議編
文化と国土設計　松本清張等著
わが体験　曽野綾子
冬の蛍　山口瞳
人生仮免許　ある私小説　小田実
タコを揚げる
サイカクがやって来た　藤本義一
西域をゆく　井上靖共著
サイゴンから来た妻と娘　近藤紘一
鉄の時代　日野啓三
キャンパスの雨　三好京三
古典の知恵袋　小堀桂一郎
日本近代文学研究　伊豆利彦
女弁護士ご免遊ばせ　渥美雅子
沿線地図　山田太一
あしたの貌　夏樹静子
青年の領域　山田智彦



風花のひと　五木寛之
テロルの決算　沢木耕太郎
図録拓本の基礎知識　篠崎四郎編著
山の心　山岳研究会編
母子関係　斉藤茂太
難病研究と展望　沖中重雄編
ほか五十三冊

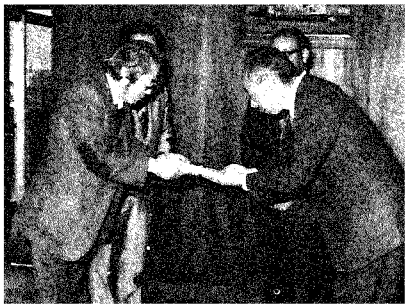
## 児童図書

あるくのがきらいな王さまのはなし　松野正子
トムとチムの赤いじどうしゃ　大石真
のらねこの詩　なかえよしを
キミも切手博士　平岩道夫
やさしい将棋入門　芹沢博文
バーバパパのだいサーカス　チゾンとティラー
だれがけいとをあんでるの　いまにしすけゆき
ふしぎなバイオリン　山内清子訳
ケンムン三太のふしぎなぼうけん　山下欣一
かえるのひこうせん　長新太
やさしい天体観察　瀬川昌男
まゆこのるすばん　征矢清
ほか二十七冊

## 図書の返却について

図書の返却が遅れている利用者がおり、後を利用する人が迷惑していますので期日までに必ず返却されるようお願いいたします。

## “増田画伯”パリ帰国に際して市に百万円を贈る



増田誠画伯は再び都留市を訪問し、美術館建設構想を聞き非郷土美術館を1日も早く建設し、文都市としてのすばらしい。自分は出来るだけの協力をさせて頂くと語り、建設資金として金壱百万円を寄贈し、来秋の訪日の途にパリ帰郷土をあとにつきました。

## 郷土のしおり

### 近世（8）

鳥居元忠が家康の巡見をうけたという意義は何であったか。郡内は北条氏との敵対圏にあったから郡内領の動静を気にしていたからであった。元忠の政治力によって安定したものをみたかったにちがいなく長生寺、宝境寺などに立寄って富士浅間神社にも参拝して甲府へひきあげている。

この時に北条左京大夫氏綱の子として仏門にはいった金運社生督上人が諸国遍歴のときに谷村へきて、そのまゝとどまり元忠が古家のままであった別荘を寄付して一刹を建てゝ住むようになり、家康はその高名を知っていて是非とも会いたいと申しいれたが、病気と称して会なかったので常滑の茶壺をおくってなぐさめた。（現存して寺宝となっている）、元忠はこの上人に帰依して禅定山（前城山）智光院長安寺の開基となった。

徳川家康が甲斐国を領有すると三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の五ヶ国にわたって領土の総検地がおこなわれ、それが天正十七年であった。甲斐国は伊奈熊蔵家次が一国を打量し、郡内は検地奉行として寺田右京がこれにあたったがその時の検地帳は伝えられない。しかし検地がおこなわれたこの時に寺田右京が郡内絹の精巧であることを称して、江戸へもちかえったといわれがこれが何によるかわからない。（南都留郡誌　一九〇九年刊）

一五八二（天正一〇）年七月に山城国に検地をおこない、八四年の近江国の検地によって一反を三〇〇歩の新制を採用した。これから石田三成、浅野長政らを奉行として全国にわたっておこなわれたのが、いわゆる大閤検地であった。

これが一五九八（慶長三）年、秀吉の死までつづき（文禄年代におこなわれたものを文禄検地という）秀吉が統一した文量の法によった。だから近世の地方支配のもと、なり、土地制度上でも画期的とまでいわれる意義がここにあった。

この検地によって田畑の一筆ごとに面積（六尺三寸、一、九〇メートル四方とし一反三〇〇歩制（年貢収納率で耕地の石高）生産高、登録人（これを名績人という）を決定し、そして村ごとに検地帳、いわゆる水帳を作成して土地所有と農民の保有耕作権をみとめ農民が土地からはなれないようにした。これから古くあった貫高制（中世の土地面積の表示の方式の一つで、土地に対する課税額を銭（貫文）高に換算して税額で地積をあらわす、大正年代まで何貫目といわれた土地がありそのことが地名化したものが残されていた。だから石高制を確立することになりこれを（石なおし）といった。

羽田富士男